



UCCG-9396

KARAJAN

FUMONKAN LIVE 1979

BEETHOVEN SYMPHONIE NO.9

Anna Tomowa-Sintow
Ruza Baldani
Peter Schreier
José van Dam

Wiener Singverein

BERLINER PHILHARMONIKER
HERBERT VON KARAJAN



ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
Ludwig van Beethoven (1770-1827)

- ① カラヤンのメッセージ [0:30]
Messege of Herbert von Karajan
- ② 拍手 [2:17]
Applause

交響曲 第9番 ニ短調 作品125《合唱》
Symphonie No.9 d-moll op.125

- ③ 第1楽章：Allegro ma non troppo, un poco maestoso [15:18]
- ④ 第2楽章：Molto vivace [10:27]
- ⑤ 第3楽章：Adagio molto e cantabile [16:15]
- ⑥ 第4楽章：Presto – Presto “O Freude, nicht diese Töne !” –
Allegro assai [24:30]
- ⑦ 拍手 [0:42]
Applause

カラヤンのメッセージ (訳)

「ここ27年間に七度、日本を訪れました。一度はウィーン・フィルハーモニー、また他は、ベルリン・フィルハーモニーとです。そして、再び日本の土を踏んでとりわけ幸せに思いますことは、この国が私の言葉、音楽を極めてよく理解してくださることです」

(注) カラヤンは、「ここ27年間に」と述べていますが、1954年が初来日ですので、このメッセージの1979年時点では、「25年間」が正確な数字です。

アンナ・トモワ=シントウ(ソプラノ)
Anna Tomowa-Sintow, Sopran

ルジャ・バルダーニ(アルト)
Ruza Baldani, Alt

ペーター・シュライアー(テノール)
Peter Schreier, Tenor

ジョゼ・ヴァン・ダム(バリトン)
José van Dam, Bariton

ウィーン楽友協会合唱団
Wiener Singverein

(合唱指揮：ヘルムート・フロシャウアー)
(Einstudierung: Helmut Froschauer)

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団
Berliner Philharmoniker

指揮：ヘルベルト・フォン・カラヤン
Conducted by Herbert von Karajan

録音：1979年10月21日 東京、普門館におけるライブ・レコーディング
音源提供：NHK/NHKサービスセンター

デジタル録音黎明期のカラヤン・普門館ライブ

1979年10月、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は「帝王」カラヤンに率いられ、このオーケストラにとっての通算6度目にあたる日本公演を東京の普門館で開催した。カラヤンはこのホールでの公演のために、サルツブルク祝祭劇場と同様の反響板まで作らせていたのである。招聘元は新芸術家協会であった。

このCDで聴くことのできる演奏は、10月21日に会場からのステレオ・ライブでNHK-FMの電波にのせられたものであるが、同時にそれはNHK／三菱電機の技術提携によるデジタル・ステレオ（固定ヘッドによる16ビット・サンプリング周波数50.4kHzのPCM〔パルス符号変調〕方式）の記念すべき第1号としての録音も行われた。とはいえ最初の挑戦だけに、機材も試作の域を超えず、現場のスタッフも戸惑うところ少なからずであったと記憶する。

いっぽう、FMは1957年に実験放送を開始し、63年には実用化試験局、さらに69年には本放送となって、この演奏会が開かれた1979年はそれから数えて10年目の節目に当たっていた。

演奏会は10月16日から25日まで9公演

（8プログラム）で、NHKはそのうちの4公演を放送した。そして、「第九交響曲」だけが会場からの生中継で全国に届けられた。この前年にはTV音声のステレオ化と同時期にFMステレオPCM回線も整備されていたのである。余談ながら、そのほかのプログラムについては、同年暮れ、12月25、26、27日の三夜にわたり、これもその直前のクリスマス・イヴに全国開通したデジタル回線を使って放送された。

会場となった普門館は5000もの客席を数える大ホールで、それだけに技術スタッフの苦労は並大抵のものではなかったらしい。ミクシングを担当した当時の制作技術局、石崎恒雄職員（この「第九交響曲」のミクシングは同局緒方孝男技師が担当）の話では、コンサート収録の会場として不慣れなところであったことに加え、短いリハーサル時間の間に、天井から吊るしたマイクのための良いポイントを決めるのに相当苦労したようである。それもそのはず、普門館はステージから天井までの高さが約25メートル、2階最前列までの距離が30メートルもあるだけに、マイクとミクシングルームの調

整卓とをつなぐケーブルも、通常の作業通路に敷設した場合には100メートルにも達して、音質の劣化が想定されたため、最短の経路がとれるよう工夫された。それでも70メートルにも及んだという。

収録は基本的にワン・ポイント方式で、メインにはノイマン社のSM69-i、ホールトーン収音用には同じくノイマンKM88-iが使われたが、ステージ上にも15本の補助マイク（サンケンCU31、CU32）が置かれた。実用化デジタル録音第1号となる千載一遇のチャンス到来というわけで、録音機もNHK／三菱のほかに、Uマチックテープやベーターテープを使ったソニーなどが賑やかに運び込まれ、部屋のなかには文字どおり足の踏み場も無い状態だったのを覚えている。すでに記したケーブルについても、夥しい数のケーブルが輻輳することに起因するトラブルを避け、当時としては最新鋭の8チャンネル・マルチケーブルが採用された。（石崎氏談）

こうしてデジタル録音されたその音は、1979年のものとは思えないほどの完成度を示している。それでもハノーヴァーのスタジオでリマスタリングされた音質的向上には目を見張る、いや、耳を疑うばかりであった。デジタル初期、私たちがその音質に抵抗をおぼえた特性が原

録音では少なからず聴きとれたものである。たとえば、弦楽群のざらつき、低音域がすっきりと抜けず混濁してしまうことなど……。リマスタリングの技術はそれらの不満の大半をみごとに拭き取った。エコーマシーンなど当時のものとは比較にならない最新の技術も駆使されたのだろう。NHKの原録音を素肌に例えれば、リマスタリングされた音はより美しく薄化粧がほどこされている。ステレオの定位感、遠近感も自然になり、聴感上の解像度も驚くほど向上した。まさに技術革新の勝利。ただ、それ以上に感心させられるのはリマスタリングを担当したディレクターとエンジニアの耳と音楽的センスの確かさである。全体的にはベルリン・フィルハーモニーの魅力である重心の低い音の響きと豊かなパースペクティヴを獲得しており、原録音に入っていた会場ノイズや雑音さえも注意深く取り除かれている。

こうしてデジタル・ステレオ黎明期の録音が保存され、リマスタリングされて蘇り、カラヤン／ベルリン・フィル絶頂期の演奏を再び聴くことができるようになったのは、現場を担当した人間にとっては大きな喜びであり、ひとしお感慨深いものがある。

〔前 和男〕（元NHK音楽部洋楽担当部長）

カラヤン普門館ライヴ1979

カラヤンの「第九」

カラヤンはベルリン・フィルとの日本公演を、1957年の第1回から1988年まで9回行ったが、そのなかでもとくに多くの聴衆を魅了したのは、大阪でブラームス・チクルス、東京でベートーヴェン・チクルスを開催した1977年と、世界的な名歌手たちとウィーン楽友協会合唱団を同行して「第九」のほか、ハイドンのオラトリオ《天地創造》、ヴェルディの《レクイエム》、モーツァルトの《レクイエム》とブルックナーの《テ・デウム》を演奏した1979年だった。1970年代になってカラヤンとベルリン・フィルがほとんど理想的ともいえる最高の状態にあったことは、マーラーの交響曲や新ウィーン楽派の管弦楽作品集など、それまで録音していなかった作品だけでなく、1975年から77年には再びベートーヴェンの交響曲全集をはじめとする主要なレパートリーにおいても十分に示されていた。そして1960年代の録音よりさらに一段と音質もよくなり、カラヤンとベルリン・フィルの精妙さの極致ともいえる一連の名演は、より多くのファンを魅了した。カラヤンとベルリン・フィルの1970年代の日本公演がNHKホールや普

門館という巨大ホールで開催された背景には、指揮者とオーケストラの代名詞のようになった感さもあるカラヤンとベルリン・フィルが、さらに多くのファンを獲得していたこともあったのだろう。

とりわけ1979年の日本公演は、不可能とされていた合唱付きの大作を演奏するというところで、それまで以上に多くの聴衆が殺到したのも当然だろう。筆者の周囲にも今回だけは聴き逃せない、九州や東北地方から聴きにきた知人も数人いたように、多くのファンが待ち望んでいたのである。それだけに聴衆の期待と興奮で会場にみなぎる熱気も尋常ではなく、多分、カラヤンの日本公演の中でも最高ではなかったのではないと思う。

そうしたやや異様とも思える雰囲気の中で、カラヤンはわれわれの期待に応える見事な演奏を聴かせてくれたが、充分に満喫させたとはいえない。それはいかにベルリン・フィルといえども、ホールが大きすぎた分、感銘の度合いもやや薄くなったため、終演後、感動しながらも何人かの友人と「もし上野の東京文化会館だったら」と悔しがったものである。

しかし、こんどリリースされるライヴ録音を聴くと、予想以上に細部まで明瞭な音質により、普門館における演奏がいかに素晴らしい演奏だったかを再認識す

る。年月とともにいつのまにか音響への不満だけが増殖し、演奏の記憶を薄れさせてしまったのだろう。実際、ライヴ録音でこれだけ完成度の高い演奏を達成できたのは、1970年代のカラヤンとベルリン・フィルだけではないかとさえ思えるし、同時に当時のカラヤンとベルリン・フィルを聴けなかった若いファンは、その水準がいかに高く、凄いものだったかを実感できるのではないと思う。

演奏者紹介

アンナ・トモワ=シントウ(ソプラノ)

1941年にブルガリアのスタラ・ザゴラに生まれ、ソフィア音楽院で学び、1965年にソフィア国立歌劇場で《エフゲニー・オネーギン》のタチアーナでデビュー後、ライプツィヒ歌劇場に移り、はじめ小さい役をうたった後、1967年に《ナブッコ》のアビガイルでデビューしてからイタリア・オペラを主に活躍、1972年からベルリン国立歌劇場のメンバーとなり、1973年にはカラヤン指揮で初演されたオルフの《時の終わりの劇》でザルツブルク音楽祭デビューを飾った。その後、カラヤンに《ドン・ジョヴァンニ》のドンナ・アンナ、《フィガロの結婚》の伯爵夫人、《ばらの騎士》の元帥夫人など、モーツァルトとR.シュトラウスの

オペラに抜擢されて成功をおさめ、「第九」をはじめ多くの録音にも参加した。2002年にソフィア国立歌劇場と来日した際にも、カラヤンは「声の成長を常に心配し、新しい曲を教え、声を守ってくれた」と語っている。

ルジャ・バルダーニ(アルト)

1937年に旧ユーゴスラヴィアのヴァラジュディンに生まれ、生地で声楽を学んだ後、ザグレブでプロチッチ、ミュンヘンでミリンコヴィチに学び、1961年にザグレブ国立歌劇場で《イーゴリ公》のコンチャコヴナでデビューした。その後、ベオグラード国立歌劇場に移り、ケルン、ハンプルク、ミュンヘン、ウィーン、ソフィア、ブダペストなど、ドイツと東欧各地にも歌劇場にも出演、1965年には《リゴレット》のマッダレーナでメトロポリタン歌劇場にもデビューした。1980年にカラヤン指揮の《アイーダ》のアンネリスでザルツブルク音楽祭にデビュー後、イタリアやアメリカ各地の歌劇場にも出演、コンサート歌手としても活躍した。

ベーター・シュライアー(テノール)

1935年にドイツのマイセン近郊に生まれ、少年時代をドレスデン十字架合奏団

員として過ごした後、声楽を個人的にボルスターとヴィンクラーに学び、ドレスデン音楽大学で指揮と声楽を学んだ。1961年にドレスデン国立歌劇場でオペラにデビュー後、ベルリン国立歌劇場を代表するリリック・テノールとして活躍、1967年にザルツブルク音楽祭とメトロポリタン歌劇場における《魔笛》のタミーノで大成功をおさめ、モーツァルトのオペラを中心に世界的に活躍する一方、バッハの受難曲の福音史家に代表される宗教曲とリート歌手としても名声を高めた。また1970年からは指揮者としても活躍をはじめ、1981年にはベルリンで《イドメネオ》を指揮して成功をおさめ、その後バッハの主要な作品をほとんど録音するなど、主に指揮者、リート歌手として活躍をつづけている。

ジョゼ・ヴァン・ダム (バリトン)

1940年にベルギーのブリュッセルに生まれ、生地音楽院でアンズバッハに学び、1961年から65年までパリのオペラ座とオペラ・コミックで多くの役柄を経験した。1967年から73年までベルリン・ドイツ・オペラを中心にモーツァルトのオペラで名声を高め、1970年代から世界の主要な歌劇場と音楽祭で活躍している。モーツァルトとワーグナーに代表される

ドイツ・オペラ、イタリアとフランスのオペラとレパートリーも大変広く、1983年に初演されたメシアン《アッシジの聖フランチェスコ》では題名役を創唱するなど、すぐれた演技力も高く評価されている名歌手で、オペラのほかコンサート歌手、歌曲リサイタルとしても活躍している。1970年から80年代にはカラヤンのオペラと声楽作品の録音にも数多く出演した。

ウィーン楽友協会合唱団

1812年に設立されたウィーン楽友協会所属の合唱団として1858年に創設された。ブラームスの《ドイツ・レクイエム》と《アルト・ラブソディ》、ブルックナーの《テ・デウム》を初演したほか、1910年にミュンヘンで初演されたマーラーの交響曲第8番《千人の交響曲》にも参加するなど、創設以来ウィーンを代表する合唱団として国際的に活躍している。メンバーは約250人のアマチュアで構成され、ムジークフェラインザールを本拠にあらゆる合唱曲を定期的に演奏するほか、ウィーン・フィルやウィーン交響楽団とバッハの受難曲やミサ曲なども、歴代の名指揮者たちと演奏している。とくに1948年に同協会の終身芸術監督となったカラヤンとは、ベルリンをはじめ

ザルツブルク音楽祭など各地で共演、多くの録音も行った。

ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団

1882年に創設されたドイツを代表するオーケストラ。はじめは団員の自主運営で常任指揮者を置かず活動したが、1887年からハンス・フォン・ビューロー、1895年からアルトゥール・ニキシュ、1922年からヴィルヘルム・フルトヴェングラーという巨匠たちが首席指揮者をつとめ、世界最高のオーケストラと評価された。1955年、カラヤンは前年に急死したフルトヴェングラーに代わって戦後初のアメリカ演奏旅行を成功させ、1956年から1989年4月に辞任するまで芸術監督、終身指揮者として活躍、この間に世界各地への演奏旅行と3度の「ベートヴェン交響曲全集」に代表される数多くの録音を行った。カラヤンの没後、1990年からアバド、2002年からラトルが芸術監督、首席指揮者をつとめている。

ヘルベルト・フォン・カラヤン (指揮)

1908年にザルツブルクに生まれ、モー

ツァルテウム音楽院とウィーン音楽アカデミーで学び、1929年にデビュー、同年からウルム市立劇場の指揮者をつとめた。1935年にアーヘンの音楽総監督に就任した頃から国際的に注目され、1937年にウィーン、1938年にベルリンに客演して大成功をおさめて「奇蹟のカラヤン」と呼ばれ、1939年からベルリンを中心に活躍した。戦後の1948年からウィーン楽友協会の芸術監督、スカラ座のドイツ・オペラ監督、フィルハーモニア管弦楽団との一連の録音などによって世界的な名声を獲得、1956年にベルリン・フィルの芸術監督、終身指揮者に就任、1956年～60年ザルツブルク音楽祭芸術監督、1957年～64年ウィーン国立歌劇場の総監督も兼ねた。その後1969年から71年にパリ管弦楽団の音楽顧問を兼ねた以外はベルリン・フィルに専念し、ザルツブルクの夏の音楽祭に毎年出演させたほか、1967年から復活祭音楽祭、1973年から聖霊降臨祭音楽祭を開催、また世界各地にしばしば演奏旅行を行い、日本公演も1957年から88年まで9回行った。

[浅里公三]

作品について

交響曲 第9番 作品125《合唱》

「シラーの頌歌『歓喜に寄す』を終末合唱にもつ、大管弦楽と4声の独唱と4声の合唱のための」このモニュメンタルな交響曲が完成したのは、1823年末か翌24年初め、ベートーヴェンが53歳の時とされている。しかし、ベートーヴェンが1786年にある雑誌に発表されたシラーの『歓喜に寄す』を知り、それに作曲しようと思ったのは、彼がまだ故郷のボンにいた青年時代のことで、1798年のスケッチ帳にはその詩の一部と旋律が記されている。そして、その後も何度もスケッチ帳に現れることから、この詩が常にベートーヴェンの心にかかっていたことは確かなことだろう。また、ベートーヴェンは、第9交響曲の出版をライブツィヒの出版者プロブストと交渉した時に、「……私の合唱付き《クラヴィア・ファンタジー》と同じようなやり方で、しかし、それよりもずっと大きく」と述べているから、1808年の《合唱幻想曲》作品80を第9の終末合唱の前史的な作品としてみなしていたことは事実のようである。しかし、彼が実際にいつシラーの頌歌を交響曲の終末合唱に用いようと思ったのかは、はっきりとは判っていない。

一方、ベートーヴェンは、すでに1809年のスケッチ帳に第9交響曲の第1楽章冒頭にみられる導入音形を書きこんでおり、1912年のスケッチ帳には「ニ短調交響曲」という文字が、1815年には第2楽章のスケルツォの主題が記されている。そして、1817年から18年にかけて彼の9番目の交響曲のスケッチにとりかかり、第1楽章のアウトラインは、ほぼこの時期にできあがっている。ただ、この頃のベートーヴェンは、シラーの頌歌は別の交響曲のフィナーレに用いようと考えていたようで、長年にわたって折りこみながらベートーヴェンの頭に去来していたこれらの楽想が、具体的にひとつの交響曲としてまとまりをとるようになったのは、結局1822年の秋になってからのようである。当時、ベートーヴェンは《ミサ・ソレムニス》の作曲に熱中していたが、この時期のスケッチ帳には《歓喜の歌》の最初の旋律が書かれている。しばしば「私の最大の作品である」と断言し、その自筆譜の冒頭に「心より出て、心に」と記したこの宗教曲を作曲中のベートーヴェンの心に、人類の喜びと平和をうたいあげたシラーの頌歌が浮かんだのは当然のことであったといってもよいだろう。しかも、ちょうど同じ時期に、ベートーヴェンはロンドンのフィルハーモニ

協会から新しい交響曲の依頼を受けた。そして、1823年春に《ミサ・ソレムニス》を完成したベートーヴェンは、直ちに「ニ短調交響曲」の作曲にとりかかって、その年の10月にははじめの3つの楽章を書きあげ、前述のように1823年末か1824年の初めには、以前は別の交響曲のフィナーレとして計画されていたシラーの頌歌をフィナーレとして、この交響曲の全曲を完成した。

こうしてシラーの頌歌への作曲を思い立ってから実に30年余りをへて完成された第9交響曲は、1824年5月7日、ウィーンのケルントナートーア劇場で、満員の聴衆を前に初演された。そして、序曲《献堂式》にはじまったこの演奏会では《ミサ・ソレムニス》の一部も初演され、第9交響曲は、第2楽章スケルツォの途中で感激した聴衆の拍手のために演奏を中断しなければならなかったという。しかし、総指揮者として舞台上に立っていたベートーヴェンは、すでに耳がまったく聞こえず、演奏が終わった後も聴衆に背を向けたままで、アルト歌手のウンガーにうながされて初めて初演の成功を知り、熱狂する聴衆の拍手に頭を下げて応えたという。なお、耳の聞こえないベートーヴェンに替わって、この時の演奏を実際に指揮したのは、当時の著名な指揮

者イグナツ・ウムラウフの息子ミヒャエル・ウムラウフであった。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ、ウン・ボコ・マエストロソ、ニ短調、4分の2拍子、ソナタ形式。神秘的に漂う空虚5度の和音の中から第1主題の動機が断片的に奏され、やがて巨大な第1主題が立ち現れる。第2主題は変口長調で、展開部、再現部と壮大な音楽が大河のように流れていく。

第2楽章 モルト・ヴィヴァーチェ、ニ短調、4分の3拍子。メヌエットの代わりにスケルツォを用いることは、ベートーヴェンの創始になるが、ここではそれが通例の第3楽章ではなく、第2楽章に置かれている。そして、ベートーヴェンのスケルツォの頂点をなすその音楽は、ふたつの旋律をもつプレストのトリオをはさんで、速いテンポでいかにも切れ味よく躍動し、ティンパニが見事な効果を発揮する。

第3楽章 アダージョ・モルト・エ・カンタービレ、変口長調、4分の4拍子。ふたつの大きな主題による自由な変奏曲形式。次に《歓喜の歌》を控えたこの緩徐楽章では、いかにも清澄な安らぎにみちた音楽が崇高な美しさの中にうたわれるが、結尾では、その夢に警告を与えるように、鋭いファンファーレが2度奏さ

れる。

第4楽章 プレスト、ニ短調、4分の3拍子、自由な変奏形式。不協和な和音がぶつかり合う異様な激しさで曲がはじまり、これまでの3つの楽章が回顧されるが、それも次々と否定されて、やがて歓喜の主題が示され、次第に力を加えて盛り上がっていく。

そして、「ああ友よ、そんな調べではだめなのだ！ 声を合わせてもっと楽しくうたおうではないか……」というベートヴェン自作の詩による有名なバリトン独唱となり、つづいてシラーの頌歌をうたいあげて、合唱を導入する。以下、四重奏と合唱が〈歓喜の歌〉の第2節と第3節をうたい、アレグロ・アッサイの行進曲がきこえてくると、テノール独唱、

さらに男声合唱がすばらしい器楽フーガをはさんで、第4節を高らかにうたいあげる。

つづいてアンダンテ・マエストーソの荘厳なコラル旋律によって男声が第5節をうたいだし、やがてアレグロ・エネルジーコとなって、合唱が第5節と前節の詩を併用して壮大な二重フーガによって全曲の頂点を築く。そして、曲は、さらにアレグロ・マ・ノン・タントに転じて、四重唱と合唱が第1節の詩をうたい、美しいアダージョの部分をはさんで、〈歓喜の歌〉はプレスティッシモのフィナーレへとなだれこみ、一度テンポを落とした後、熱狂的に全曲を閉じる。

[歌崎和彦]

»AN DIE FREUDE«

*O Freunde, nicht diese Töne!
Sondern laßt uns angenehmere anstimmen
und freudenvollere!*

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt.

Wem der große Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt, der stehle
Weinend sich aus diesem Bund.

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott!

『歓喜に寄す』

おお友よ、このような音ではない！
もっと快いもっと歓びに満ちたものを
歌い出そうではないか！

歓びよ、美しき神々の火花よ、
それは楽園から来た乙女なのだ、
われらは火の如く酔いしれて、
天にもまがう汝の聖堂に踏み入るのだ！
世俗の習慣が強引に引きはなしたものを、
汝の魔力は再び結びつけてくれる。
汝のやさしい翼のとどまるところ、
すべての人々は兄弟となる。

ひとりの友を真の友にするという、
難事を克服した者や、
やさしい心の女性を妻にした者は、
歓びの声をともに挙げるのだ！
そうだ、この世界の中で
たとえ一つでも人の心をかち得た者は共に飲むのだ！
しかしこれらに失敗した人は
涙しつつこの同盟から去らねばならぬ。

生きとし生ける者は
自然の乳房から歓びを飲む。
すべての善なる者も、悪なる者も
自然が開いたばらの道をたどって行く。
その自然はひとしく我らにくちづけとぶどうの房と、
そして、死の試練をくりぬけた一人の友を与えた。
情欲的快樂は虫けらに与えられたのだ、
そして神の御前には智の天使ケルビムが立ち給う！

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen, Millionen.
Diesen Kuß der ganzen Welt!
Brüder! Über'm Sternenzelt
Muß ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such' ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muß er wohnen.

天の広大な計画に従って
神のさまざまな天体がめぐり行くように、
歩め、兄弟たちよ、汝らの道を、
凱旋の英雄のごとき歓びをもって。

抱擁を受けよ、もろびとよ。
全世界の接吻を受けよ！
兄弟よ！ 星の輝く天蓋の上に
愛する父がおわします。
地にひざまずいたか、もろびとよ？
造物主のいますことに気づいたか、世界よ？
星の輝く天蓋の上に、彼を求めよ！
そこに、必ずや彼はおわします。

[訳：渡辺 護]

カバー表(普門館)及びインレイカード写真提供：(株)俊成出版社

Recording: NHK (JAPAN BROADCASTING CORPORATION)

Remastering Supervisor: Makoto Shinohara

Remastering Engineer: Andrew Wedman



Edited and mastered by Emil Berliner Studios

■ユニバーサル ミュージック携帯サイトへのアクセス方法

- ◇iモードをご利用の方 i Menu⇒メニューリスト⇒音楽/映画/芸能⇒音楽情報⇒ユニバーサル ミュージック
- ◇EZwebをご利用の方 EZトップメニュー⇒カテゴリで探す⇒エンターテイメント⇒音楽⇒ユニバーサル ミュージック
- ◇J-スカイをご利用の方 J-スカイメイン⇒エンタメ・芸能⇒映画・音楽⇒ユニバーサル ミュージック

■ユニバーサル ミュージックのホームページ <http://www.universal-music.co.jp/>

取り扱い上のご注意●ディスクは両面とも、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱ってください。●ディスクが汚れたときは、メガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取ってください。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないでください。●ディスクは両面とも、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないでください。●ひび割れや変形、または接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないでください。保管上のご注意●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないでください。●ディスクは使用后、もとのケースに入れて保管してください。●プラスチック・ケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。